

一晩中降っていた雪がやむとびつくりするほど青い空が顔を見せた。

いまはまだ冬本番というわけではないが、冬の国ではもう秋の終わりを感じる。駆け足で冬が近づいてきているのだ。

そんななか目の覚めるような青空がのぞいた。

空気は冷たく、できれば暖かい布団からはでたくない。いや、事実絶対出たくないのだが、それでもこれならば表に出ようかという気分になる。それくらいの青空だった。

それが勇者と一緒に遠出であればなおさらだ。

「デートだ」

前を行く勇者には聞こえないようにつぶやいてみる。

だらしない笑みがこぼれるのを自分でも止められない。

「デートだ。勇者と、二人で、街まで、買い物。ふふふふつ」

「おーい。なにほんやりしてるんだよ」

「なんでもないぞつ」

わたしは答えると、勇者に追いつこうと小走りに移動する。

今日は本当に素晴らしい日だ。

転移で移動した先はまばらに生えた白樺しらかばの林の中だつた。かんばつ間伐されているのだろう。人の手が

はいつてる証拠である。そのことからも、この林が目的地の近くであることはすぐ分かつた。  
「もう氷の国か？」

「ああ、すぐだよ」

勇者は振り返つて、足下の雪を踏み固めてくれる。

まだ正午にもならない日差しが稜線から差し込み、勇者の表情を逆光の中に溶け込ませた。見えないその表情に、わたしの胸はちくりと痛み、追いつくために焦つてしまふ。

勇者はわたしのモノで、わたしは勇者のモノ。その契約は本当だ。

長い間焦がれ続けてきた相互所有契約。でもだからといって互いのすべてを直ちにわかり合えるわけではない。

だからこんな時には、なんだか焦るような、むずむずするような気持ちになる。嬉しいのは本当だ。

勇者と共に過ごす時間はいつでもわたしの喜びで、こうして一人つきりで出かける遠出ともなればそれはひとしおというもの。

でも、それでも、融けあえるわけではない。

勇者に優しくされると、なんだか奇妙に胸のうずきと寂しさを感じるのはなぜだろう？

逆光の中で影となつた勇者は、きっと微笑んでいるけれど、それがもどかしくて、すこしきだけない。

「そら。いこうぜ。すぐにつく」

「うむ。もちろんだ」

わたしは勇者の横顔を見上げて歩き出す。

勇者とふたりで林の中の小道をたどり、到着したのは氷の国<sup>うげん</sup>の首都、羽弦<sup>うげん</sup>の都だった。どこからかファイドルの調べが流れている。

吟遊詩人の都だけあって、こんなに寒くとも、空が輝けば演奏をする樂士がいるらしい。城壁の外は雪景色だつた。メイド長を残してきた冬の国よりも、降雪がはやいのだろう。「ああ、そうだな。つていうか、冬越し村は平地だけど、ここは山の中だからな」

「そうなのか？」

「ああ。俺たちは転移魔法で来ちゃつたけれど、冬に歩いてくるのは結構大変なんだぜ」

「そうなのか。」

わたしの疑問に答えてくれた勇者も、そしてわたしも、吐き出す息が白い。

でもそう言われてみれば、そんな資料を読んだことがある。

氷の国は南部を構成する四つの国の中でもひときわ小さい国だ。

鉄の国から続く天綱<sup>てんこう</sup>山脈に抱きしめられるようにして存在する小国。あまりにも小さいその領地の中には、首都である吟遊詩人のふるさと、羽弦の都と、あとは本当にいくつかの村しかない。山の中にできた嘘<sup>うそ</sup>のような盆地にある別世界。古謡にある緑の園にたどえられるほど穏やかな国だそうだ。

「――吟遊詩人のふるさと、だつたつけ」

「ああ、そうさ。よく知ってるじゃないか」

「以前に資料で読んだだけだ」

「まったく魔王は真面目だな」

勇者がにつこりと笑う。

その笑顔で我知らず動悸<sup>どうき</sup>が加速してしまうのを抑えきれない。「それくらい当然だ」と胸を張つてごまかしたが、勇者は微笑んだままだ。連れ合いにと望んだのはこちらだが、いつもいつでもこんなに余裕がないと、恨みたくもなる。

「勇者」

「なんだ?」

「なんでもない。ただ呼んでみただけだ」

腹立たしさを込めて、その裾を握つてやつた。

こちらだけが振り回される気分は、精神衛生上よくない。

しかし考えてみると、その精神衛生などといった経験もはじめてのことなのだつた。ふれあえると飛び上がるほど嬉しいし、勇者に避けられると悲しくて胸が痛くなる。我ながら小児的なものだ。二百年も生きてこの有様なのだから、呆れてしまう。でも、呆れながらもそれが心地いい自分がいるのも事実なのだつた。

勇者に所有されて以来、喜びは深く、寂しさは鋭く、切なさは焦げつくほどになつた。ふれあえると飛び上がるほど嬉しいし、勇者に避けられると悲しくて胸が痛くなる。我ながら小児的なものだ。二百年も生きてこの有様なのだから、呆れてしまう。でも、呆れながらもそれが心地いい自分がいるのも事実なのだつた。